

光永眠雷「西郷隆盛肖像」の成立

中 元 崇 智

はじめに

西郷隆盛は明治維新における薩摩藩の政治指導者、そして明治維新後は明治政府の中枢を担い、参議・陸軍大将などを歴任した人物である。そして、明治三十一年、東京上野公園に西郷隆盛銅像【図1】が建てられ、それは日本でもっとも有名な銅像の一つとなった。

この西郷銅像は主に美術史の分野を中心に検討されており、青木茂氏は西郷銅像の特徴や制作者、建設場所について絵画論から指摘した⁽¹⁾。また、吉田千鶴子氏は西郷銅像の建設経緯について紹介する一方、西郷銅像の犬についても言及し⁽²⁾、田中修二氏も彫刻家後藤貞行が西郷銅像の犬を制作する過程に

ついて検討した⁽³⁾。

恵美千鶴子氏は宮内省や東京府の公文書を分析対象に加えて、西郷銅像建設の経緯とその像容を詳細に検討した⁽⁴⁾。恵美氏は西郷銅像の設置場所が当初宮内省から許可された宮城前（皇居前）ではなく、最終的に上野公園へ移った理由について明治二五年

一月一二日付の井上毅意見書を参照して、華族たちの反対があつたこと、『読売新聞』の社説が



図1 上野公園の西郷隆盛銅像
(筆者撮影)

ら、西郷が西南戦争を起こした「国賊」だった点が問題となったことを推定した。その上で、恵美氏は西郷銅像が陸軍大将の軍服から和服姿になった経緯も指摘し、西郷銅像が素朴で国民が愛慕する西郷のイメージ形成に寄与し、国民の英雄として敬愛されることとなったと結論づけた。この恵美論文は実証的で優れた研究であり、以後の西郷銅像に関する諸研究に大きな影響を与えることとなった。⁽⁵⁾しかし、恵美論文は宮内省や西郷銅像を建設した発起人側の史料が分析対象とされていないため、明治二五年に西郷の銅像が宮城前から上野に移った背景についてはなお疑問が残る。

一方、西郷の肖像については、村野守治氏が西南戦争関連錦絵の点数（一一四一点、六一一場面）を明らかにした上で、西郷の錦絵に虚構が多く、西郷に髭が生えた錦絵が多いことを指摘した。⁽⁶⁾しかし、錦絵以外の数多く描かれた西郷の肖像については、個別実証的な学術研究は管見のかぎりほとんど進んでおらず、特に西郷銅像建設後に描かれた西郷像については研究がなされていない。

以上のような先行研究の状況を踏まえて、本稿では西郷隆盛銅像がなぜ宮城前から上野公園に移ったのかを検討した上

で、西郷銅像建設後に描かれた、光永眠雷の「西郷隆盛肖像」について考察する。これを検討することにより、一枚の「西郷隆盛肖像」がなぜ描かれたのかを明らかにし、その政治的背景や歴史観に迫りたい。

一、西郷隆盛銅像の上野移設と政治的背景

明治三一（一八九八）年二月十八日、高村光雲・林美雲・後藤貞行が制作し、岡崎雪声が鑄造した西郷隆盛銅像の除幕式が上野公園において、挙行された。⁽⁷⁾この銅像は元々、宮城前に建設される予定であり、明治二三（一八九〇）年七月二十八日、銅像発起人総代樺山資紀（薩摩藩出身・海軍大臣）、九鬼隆一（三田藩出身・特命全権公使兼帝国博物館総長兼宮中顧問官）が東京府知事に西郷銅像の宮城正門外設置を願ひ出るため添翰願を提出、八月八日東京府知事から宮内大臣にこの建設願を上申した。⁽⁸⁾そして、明治二四年九月一四日、土方久元宮内大臣が宮城正門外に西郷銅像の建設を許可したが、その決定を宮内大臣から東京府に伝達する公文書には「宮城正門外」とのみ記され、「但場所ノ義ハ追テ相達スヘシ」と

具体的な場所について指定していなかった。⁹⁾

しかし、明治二五年二月八日、宮内省は宮城正門外の設置許可を「詮議ノ次第有之取消」することを決定したが、但書で「上野公園地内ニ建設ノ望有之候得ハ博物館長ニ協議ノ上場所選定更ニ出願致サスヘシ」と記されていた。¹⁰⁾この時の帝国博物館長は出願者の九鬼隆一その人であり、上野公園はその管理下にあつた。その後、九鬼ら発起人は明治二六年三月一五日に上野公園地内への建設を願ひ出て、同年四月一日に設置許可を得ることとなつたのである。¹¹⁾

この経緯について、恵美氏は井上毅の意見書に付記された「故贈三位西郷隆盛ノ記念碑ヲ丸ノ内ニ建設スルノ事ニ付テハ未ダ世ニ発表セズト雖、既ニ物議ノ種子トナリ、殊ニ華族中ニ不服ノ言アルヲ聞ク」との文言を取り挙げて華族の反対があつたことを指摘した。¹²⁾その上で、恵美氏は『読売新聞』が社説で「国賊」西郷の銅像を宮城正門外に建設することに反対したことを挙げて、華族たちが反対した理由を西郷が「国賊」であつたためと推測しているが、具体的に反対した人物やその理由については明らかではない。

この西郷銅像の上野移設に関して重要となるのが、明治二

五年一二月に西郷銅像の設置許可を取り消した宮内省とそれに応じた銅像発起人総代樺山資紀、九鬼隆一らの動向である。当時の宮内大臣は土方久元（土佐藩出身）、宮内次官は花房義質（岡山藩出身）であつたが、杉孫七郎皇太后宮大夫（長州藩出身）は花房に対して西郷銅像の宮城正門外建設を懸念し、批判的な立場を示していた。

杉は明治二五年一月九日、花房に対して書簡を送り、「西郷隆盛銅像西丸下旧元老院辺へ建設之事八業已ニ大臣より思食伺定発起人へ内達」されることが新聞紙に掲載されて以来、諸有志が議論し「新聞論説を以西郷末路ノ事ヲ引出し論し宮城下ニ銅像建設之不都合ヲ論し候勢ニ可相成」と觀察、考慮を促していた。¹⁴⁾そして、杉は花房に薩摩藩出身の元勳黒田清隆や長州藩出身の元勳伊藤博文、山縣有朋、内務大臣の品川弥二郎らと「篤と御協議」するように促したのである。杉は「西郷氏ノ功と罪とハ自ラ天下之公論可有之」と見ており、西郷を「終始勤王ノ功ヲ全して死候維新之功臣」と同列視すべきでないと考えていたのである。このように、杉は西郷銅像建設に関する新聞報道を憂慮しており、花房に薩長の元勳らとの協議を促したのであつた。

さらに、杉は一月二四日付花房宛書簡の中で、一二日朝に發起人総代で宮中顧問官を兼任する九鬼と面会し、西郷銅像に関する自らの意見と「世人之議論等実二不穩二而考候」と伝えている。⁽¹⁵⁾これに対して、九鬼は「業已銅像建設之地八西城下八不都合二候上野公園中へなるも致度事八樺山氏二八申談置同氏も同感二有之」と回答し、宮城前（西城下）が西郷銅像に不都合であることを認め、樺山とともに西郷銅像を上野公園に移す形で建設したいとの意志を示した。この際に、九鬼は建設有志者には伝えていないが、「いつれ場合を見合て西城下八差止候心付二而安神致呉候様の確答」をしており、杉も「西城下云々之事八都合を以御取消願出候方穩当と考っていたのである。

一方、九鬼もこの前後と推定される時期、杉に書簡を送り、「併該件（西郷隆盛銅像 筆者注）委員若^{（マ）}物共之情勢二於而目下説破致シ難キ次第有之」と伝え、銅像設置場所の変更に対して委員の「若物共^{（マ）}」が納得していない状況について知らせている。⁽¹⁶⁾その上で、九鬼は「必然願下げ之順序ヲ執り候積二御座候次第」と、宮城前建設の願書取り下げに言及しているが、「万一此際速二願下げ相成兼候事情」が生じた場合は

「事二より御許可御取り消し之運ヲ願候哉も可被図候」と宮内省による許可取消の可能性についても示唆していた。

このように、西郷銅像の建設場所を宮城前（西丸下旧元老院跡）とすることに宮内省内で批判を唱えたのが杉であった。長州藩出身の杉は西南戦争の首謀者西郷を「維新之功臣」と同列視すべきでないと考えており、銅像發起人総代で宮内省とも関わりの深い九鬼と面会し、九鬼から西郷銅像の「西城下八差止」との確約を得ていた。

一方、九鬼や樺山も宮城前が不都合であれば、九鬼が館長を務める帝国博物館の管理下にあった上野公園への西郷銅像建設に同意していた。杉と九鬼ら西郷銅像發起人のこうした交渉もあって、西郷の銅像は明治二五年二月八日に宮城正門外の設置許可が取り消され、翌年四月一三日に上野公園への設置が許可されることとなったと考えられる。

一、西郷隆盛銅像に対する批判と キヨソネ「西郷隆盛肖像」

紆余曲折の末、上野公園で除幕式が行われた西郷隆盛銅像

については多くの異論が寄せられた。除幕式に臨席した、西郷隆盛の未亡人イトは「アラヨウ、宿ンしは、(家の人は)こげん(こんな)人じゃなかつてえ(なかつたのに)」と叫んだとされている。¹⁷⁾ この発言の意図については、平素礼儀正しかった西郷が膝までの着物に兵児帯姿だったからとする説や西郷本人と顔が違うからとする説がある。

しかし、西郷銅像が本人に似ていない(?) と思つたのはイトだけではなかった。西郷銅像建設の発起人総代樺山資紀の養子、樺山愛輔は「これを製作するには、高村光雲氏は随分苦心したらしい。何としても西郷さんの特徴であつた唇の感覚が出ない」と具体的に唇が似ていない点を指摘している。¹⁸⁾ 西郷銅像の木型を制作した、高村光雲本人も西郷の写真がなく、顔を再現するのが困難だったと述べている。¹⁹⁾ そのため、高村は西郷の従兄弟大山巖などに、細かく西郷の顔について尋ねて銅像を制作したとしており、高村は「其れをドウやら斯うやら纏めましたが併し自分ながら不完全で恥ぢ入ります」と述懐している。

また、明治六年政変当時参議であり、西郷とともに下野した板垣退助も「所が世間に伝はる写真油絵石板の類は申すに

及ばず上野の銅像まで私の記憶する所とは非常の相違である」と述べており、西郷の顔と銅像が違う点を指摘した。²⁰⁾

こうした背景には、西郷が写真を嫌っていたために、西郷の写真が存在しないという事情があつた。²¹⁾ 西郷の写真に関しては、西郷の長子で京都市長となつた西郷菊次郎が「父は生前写真といふものは唯の一度も取つたことがありません」と述べている。²²⁾ また、板垣も「元来西郷と云ふ人には写真と云ふものがない」と述べており、西郷の写真を参考にして銅像を制作することができなかったのである。²³⁾

このため、上野公園の西郷銅像制作の原型となつたのがキヨソネの「西郷隆盛肖像」であつた【図2】。イタリア人の御雇技師キヨソネは明治八年から明治二四年まで大蔵省印刷局に在職、明治天皇



図2 キヨソネ「西郷隆盛肖像」

(「日本及日本人」臨時増刊南洲号口絵)

らの肖像画などで著名な人物であり、明治一六（一八八三）年にキヨソネが西郷の肖像画を描くこととなった。この時描かれたキヨソネの「西郷隆盛肖像」について、西郷菊次郎は「ソレは額は誰目や鼻や口は誰といふ様に、一々兄弟や、近親の顔の一部分宛ツギハギして、どうやら父の倅に似たものが出来た」と述べており、弟の西郷従道や大山巖ら、兄弟親族の顔の一部を組合わせたことが想定される。

三、光永眠雷「西郷隆盛肖像」の成立と

政治的背景

西郷銅像の原型となったキヨソネの「西郷隆盛肖像」に対して、反発したのが熊本県出身の洋画家光永眠雷であった。光永は明治二三（一八八〇）年に東京工部大学教授ジケローに入門し、洋画を習得した。そして、明治一七（一八八四）年に光永は印刷局御雇キヨソネの下で油絵を研究している。しかし、光永はキヨソネが描いた西郷の肖像を「実は『西洋人たる南洲翁』とでもいふべき画であつて、日本人たる南洲翁の肖像では無かつたのである」と批判しており、「南洲翁

の真像を大成する」決意を固めたとされる⁽²⁵⁾。その後、光永は明治三七年に上京し、政界を引退していた板垣退助を訪問、板垣の勧めを受ける形で西郷の肖像を描くこととなった。

明治三九年二月、板垣と大山巖が両者の眼中に残る西郷の肖像を某画伯（光永）に描かせたことが報道されている⁽²⁶⁾。同年五月三〇日、板垣は光永と西郷侯爵邸を訪問、隆盛未亡人イト、従道未亡人、上村彦之丞海軍大將らと面談し、彼らの意見を受けて西郷の肖像を修正した。その修正作業は「其の親しく教へられし所を参照して描き、描きし所の肖像に就きて更に批評を請ひ、批評せらるゝ所に徴して更に似ざる点を正たした」というものであり、光永は西郷の縁戚や関係者を訪問しながら、教えられた点を参考にして描き、さらに彼らの批判を得て容貌の異なる点を修正して完成に近づけていったのである⁽²⁸⁾。

明治四〇年一月、光永の描いた西郷の肖像は「最も能く真を得たり」と評価され、板垣や西郷家、関係者から西郷の「真像」との評価を受けた⁽²⁹⁾。そして同年一月二八日、西郷家より大山巖の手を経て宮内省に献上されたが、一度下げ渡しとなり、翌四一年二月九日に明治天皇に「献納済み」と

なった⁽³⁰⁾。さらに、明治四三（一九一〇）年九月、日韓合邦（日韓併合）記念として東京神田今川橋青雲堂が光永の描いた「西郷隆盛肖像」の写真版を印刷・発行し、「西郷隆盛肖像」が頒布されることとなった⁽³¹⁾。

それが、岡山県立記録資料館所蔵の光永眠雷「西郷隆盛肖像」【図3】である。「西郷隆盛肖像」の上には天皇が見たことを示す「賜天覧」の文字が大書されている。また、光永の跋文が「西郷隆盛肖像」の下部にあり、「賜天覧」の文字と光永の跋文の間に「西郷隆盛肖像」が配置される構図となっている。

光永眠雷「西郷隆盛肖像」の跋文は西郷を「翁夙二世界ノ形勢ヲ達觀シ中興ノ宏謨シ維新ノ大業既ニ成ルヤ更ニ大陸ニ向ツテ大抱負ヲ試ントス」とし、明治維新の功績と征韓論の「大抱負」からその功績を高く評価している。しかし、西南戦争の経緯にはふれておらず、「時利アラス悠然トシテ逝ク」と記すのみであり、維新の元勳、征韓論、大陸進出の先駆者としての評価が際だっている。

では、板垣退助が光永眠雷に「西郷隆盛肖像」を描かせた理由はどこにあるのか。前述したように、板垣は上野の西郷

銅像が生前の西郷の顔と違っていると、違和感を示していた。板垣は「斯様な真像は一アツテ」なきものでありますからどうか之（光永「西郷隆盛肖像」筆者注）を以て上野の銅像を改鑄するまでに運びたいと思つて居ります」とまで発言しており、生前の「西郷真像」を残したいという思いがあったと考えられる⁽³²⁾。

しかし、より重要な理由として、板垣退助監修『自由党史』との関係が挙げられる。『自由党史』とは、自由民権運動研究において重要な位置を占める歴史書であり、日韓併合と同じ明治四三年に刊行された。板垣は明治三年の政界引退後の仕事として、「自由党史及び南洲肖像を成すを以て自己一生の事業と定め居る」と語っていたのである⁽³³⁾。

なぜ、自由民権運動の歴史を描いた板垣監修『自由党史』と西郷の肖像が関係するのか。それは



図3 光永眠雷「西郷隆盛肖像」
(岡山県立記録資料館所蔵・筆者撮影)

【図4】のように、「自由党史」上巻の口絵巻頭に光永の「西郷隆盛肖像」が掲載されているからである。³⁶⁾『自由党史』では主たる登場人物の顔写真や肖像画が上・下巻の口絵に掲載されているが、その順番と写真・肖像画の大きさが自由民権運動で活躍した人物の序列を示している。そのため、本来ならば元自由党総理である板垣が一頁目の筈であるが、板垣は二頁目【図5】であり、西郷が一頁目に登場しているのである。ここに、板垣が光永に西郷の肖像を描かせた理由があると考えられる。

この理由については、かつて拙稿で指摘したことがあるので要約して説明する。³⁶⁾第一の理由は、板垣が西郷を征韓論の同志として捉え、明治六年政変を自由民権運動の出発点とする歴史観にあると考えられる。板垣は「西郷南洲と予との関係」で、韓国併合はそもそも板垣や西郷が唱えた明治六年の「征韓論」の趣旨を実現したものであるとし、「則ち征韓論は維新の初めより我邦の国是」であったと主張した。³⁷⁾つまり、



図4 光永眠雷「西郷隆盛肖像」
(『自由党史』口絵 1p)



図5 板垣退助写真
(『自由党史』口絵 2p)

板垣は西郷を大陸進出の先駆者として評価したのである。また、板垣は「吾々征韓論者は徹頭徹尾我が議論が正しい」と自らと西郷の「征韓論」が正しかったことを繰り返し強調しており、明治六年政変を重視する歴史観をそこから読み取ることができる。³⁸⁾

第二の理由は、板垣が西郷を「民選議院論者」として評価した点にある。『自由党史』では板垣退助・江藤新平ら明治六年政変で下野した前参議たちを中心とする八名が政府専制

の弊害を批判し、民選議院の開設を要請した民選議院設立建白書の提出について特記されている。この民選議院設立建白書に西郷は署名していないが、板垣は『自由党史』で西郷も民選議院設立に同意したとして、西郷も「亦た民選議院論者の一人」とする評価を与えたのである。⁽³⁹⁾

このように、板垣が征韓論の同志・「民選議院論者」として西郷を高く評価したために、光永「西郷隆盛肖像」が描かれ、『自由党史』の口絵巻頭を飾ることとなったのであった。

おわりに

本稿では、西郷隆盛銅像がなぜ宮城前から上野公園に移ったのかを検討した上で、上野の西郷銅像建設後に描かれた、光永眠雷「西郷隆盛肖像」とそれが描かれた政治的背景や歴史観について考察した。

明治三十一年に上野公園で除幕式が行われた西郷隆盛銅像は元々宮城前に建設される予定であった。しかし、西郷隆盛は明治維新政府の参議、陸軍大将、明治維新の立役者であったが、同時に明治一〇年の西南戦争の首謀者でもあった。その

ため、一度は宮城前に建設を許可した宮内省内からも反発の声が上がることとなった。その急先鋒となったのが長州藩出身の皇太后宮大夫杉孫七郎であった。杉は西南戦争の首謀者西郷を「維新之功臣」と同列視すべきでないと考えており、明治二十五年一月に銅像発起人総代の九鬼隆一と面会し、九鬼から西郷銅像の「西城下八差止」との確約を得た。これによって、西郷の銅像は明治二十五年二月八日に宮城正門外の設置許可が取り消され、翌年四月二三日に上野公園への設置が許可されることとなったと考えられる。

しかし、紆余曲折の末に上野に建設された西郷銅像は生前の西郷と似ていないなどの批判を浴びることとなった。また、熊本県出身の洋画家光永眠雷は西郷の写真が存在しないことから、西郷銅像の原型となったキヨソネの「西郷隆盛肖像」に対しても「西洋人たる南洲翁」と反発したのである。この光永の「西郷隆盛肖像」執筆に協力したのが板垣退助であり、板垣は自らが監修した『自由党史』の口絵巻頭に光永の「西郷隆盛肖像」を掲載した。その背景には、板垣が西郷を征韓論の同志、「民選議院論者」として高く評価する歴史観があったのである。

注

- (1) 青木茂「上野の山の西郷さんより発した連想的絵画論」
〔「伝統と現代」四七号、一九七七年〕
- (2) 吉田千鶴子「西郷隆盛の銅像」(「うえの」三六九号、一九九〇年)、同「西郷さんの愛犬」(「うえの」四一七号、一九九四年)。
- (3) 田中修二「近代日本最初の彫刻家」(吉川弘文館、一九九四年) 3。
- (4) 惠美千鶴子「西郷隆盛銅像考 その建設過程を中心に」
〔「文化資源学」三三号、二〇〇五年〕。
- (5) 惠美論文を参照し、西郷隆盛銅像の建設過程について検討した研究として、平瀬礼太「銅像受難の近代」(吉川弘文館、二〇一一年)、木下直之「銅像時代 もうひとつの日本彫刻史」(岩波書店、二〇一四年)などが挙げられる。
- (6) 村野守治「西南戦争錦絵について 鹿児島県立図書館・鹿児島市立美術館所蔵」(「鹿児島女子短期大学紀要」一七号、一九八二年)。
- (7) 前掲田中書 3一二―一六頁。
- (8) 前掲惠美論文七〇―七三頁参照。
- (9) 「西郷隆盛銅像宮城正門外二建設方聴許ノ処詮議ニ依リ取消シ更ニ上野公園地内ニ於テ場所選定出願ノ儀東京府へ達ノ件」(「明治廿五年重要雑録 総務課」一六号所収、宮内庁書陵部図書課宮内公文書館所蔵) 及び「宮城正門外二贈正三位西郷隆盛銅像建設ノ件ニ付宮内大臣ヨリ指令ノ件」(東京都公文書館所蔵(「明治廿五年普通第一種稟申録第二課」一〇所収)。
- (10) 前掲「西郷隆盛銅像宮城正門外二建設方聴許ノ処詮議ニ依リ取消シ更ニ上野公園内ニ於テ場所選定出願ノ儀東京府へ達ノ件」。
- (11) 前掲惠美論文七二―七三頁参照。
- (12) 前掲惠美論文七二頁および井上毅「特別召集議会に処する意見二通」(平塚篤校訂「秘書類纂 帝國議會資料」下巻「秘書類纂刊行会、一九三五年」所収四三―四四頁)。
- (13) 前掲惠美論文七二頁および「読売新聞」明治二五年四月二四日号社説「元寇紀念碑と西郷隆盛の銅像」。
- (14) 明治二五年一月九日付花房義質宛杉孫七郎書簡(岡山県立記録資料館所蔵「花房端連・義質関係資料」七八七)。なお、杉は書簡の追伸で西南戦争に際して「西郷ノ心事ハ可悲可憐當時西郷隆盛叛 天皇震怒ノ字ハ摩滅スヘカラズ」と付記しており、西郷に好意的だったとされる明治天皇の「震怒」についてもふれている。
- (15) 明治(二五)年一月一日付花房義質宛杉孫七郎書簡(前掲「花房端連・義質関係資料」七八八)。こうした交渉が成立した背景には、宮中顧問官を兼任し、宮内省と接点を持つ九鬼の政治的位置も影響していると考えられる。
- (16) 年月不詳二六日付杉孫七郎宛九鬼隆一書簡(東京都立大学付属図書館所蔵「花房義質関係文書「マイクロフィルム」」八九二六)。九鬼隆一は第一次松方正義内閣が臨んだ第二

回総選挙（明治三十五年二月一日）の選挙干渉を側面から指揮・支援するため、一月一日に京阪神地方に出張、二月十七日まで滞在している。この書簡には「先比（一月出発前）申上候」の文言があり、また西郷銅像に関する内容から明治三十五年一月以降に出された書簡と推定されるが、現時点では確定できない（佐々木隆「干渉選挙再考」、『日本歴史』三九五号、一九八一年「五八」六〇頁）。

- (17) この時の西郷隆盛銅像除幕式については、島津久敬「西郷隆盛の顔を全調査する」（芳即正編著『大西郷 謎の顔』〔著作社、一九八九年〕所収六七～七〇頁）、日本放送協会編集『大西郷の謎』（日本放送出版協会、一九八九年）六四～六六頁。

- (18) 樺山愛輔『父、樺山資紀』（大空社、一九八八年）一四九～一五一頁。

- (19) 中央新聞「明治三十二年四月二七日、四月二九日号雑報『名匠苦心譚』。鑄造を担当した岡崎雪声も、高村が西郷銅像の制作に際して、西郷の写真がなく、生前の肖像を知る人物がいなかったこと、「元印刷局御雇キヨソネ氏の石版画を根拠として翁が生前の知己親戚に付き一々其の好否を問」うたことを証言している（『国民新聞』明治三十二年二月二八日号雑報「岡崎雪声氏の西郷銅像鑄造談」）。

- (20) 『土陽新聞』明治三十九年六月五日号雑報「老西郷の面影（板垣伯の談）」（上）。

- (21) 明治五年、岩倉使節団に随行中であつた西郷の盟友大久保

利通がアメリカで撮影した写真を西郷に送付した際、西郷は「尚々貴兄の写真参候処、如何にも醜体を極候間、もふは写真取は御取止可被下候。誠御気の毒千万に御座候」と返書しており、大久保に対して写真撮影を取りやめるように勧告している（明治五年二月一日付大久保利通宛西郷隆盛書簡「大川信義編『大西郷全集』二巻（大西郷全集刊行会、一九二七年）五八六～六〇四頁）。この書簡は西郷が写真を嫌っていたことを示す史料としてしばしば引用される。

- (22) 西郷菊次郎「思ひ出づるまゝ」（『日本及日本人』臨時増刊南洲号、明治四三年九月「四日」）

- (23) 注（20）と同じ。

- (24) 注（22）と同じ。なお、西郷銅像の作成に際しては、西郷従道の写真や西郷が維新期に着用した衣冠なども参考に用いられたことが報道されている（『時事新報』明治二六年六月一日号雑報「故西郷翁の銅像」）。

- (25) 光永眠雷「南洲翁肖像を描きし径路」（前掲『日本及日本人』臨時増刊南洲号）。なお、光永は明治一九年に鹿児島の大龍学校の絵画教師となり、西郷像の資料を収集した後、明治二七年大龍学校を辞職、九州、中国、関西各地を漫遊したとされる。

- (26) 『土陽新聞』明治三十九年二月一日号雑報「板伯と老西郷」。

- (27) 『東京朝日新聞』明治三十九年六月一日号雑報「板垣伯と南洲画像」。

- (28) 注（25）と同じ。なお、明治四〇年二月一七日、板垣伯寿

筵答礼園遊会が開催されたが、その席上、板垣が食堂に「半ば出来」した「大西郷の油絵」が展示されていることを紹介し、観覧を呼びかけている。この「大西郷の油絵」は光永が作成中であつた「西郷隆盛肖像」と考えられる（『土陽新聞』明治四〇年二月二〇日号雑報「板垣伯の園遊会」）。

(29) 注(25)と同じ。

(30) 「六尺の筆を以て画く 光永眠雷氏」（『東京エコー』二巻二号、明治四二年一月一五日）、明治四一年二月九日付大山藏宛田中光顕書簡写（岡山県立記録資料館所蔵「賀陽郡川入村犬養家資料」二〇〇五、「光永眠雷筆西郷隆盛画像（印刷）表紙」）。

(31) 『読売新聞』明治四三年九月八日号雑報「西郷南洲の肖像」、「東京朝日新聞」明治四三年九月八日号雑報「西郷隆盛肖像発行」。

(32) 光永眠雷「西郷隆盛肖像」（前掲「光永眠雷筆西郷隆盛画像（印刷）」）。前掲『日本及日本人』臨時増刊南洲号の口絵にも、光永の「西郷隆盛肖像」とキヨソネの「西郷隆盛肖像」が掲載されている。

(33) 『土陽新聞』明治三九年六月六日号雑報「老西郷の面影（板垣伯の談）」（下）。

(34) 注(25)と同じ。

(35) 板垣退助監修、宇田友猪、和田三郎編纂『自由党史』上巻（五車楼、明治四三年）、口絵一頁。

(36) 拙稿「土佐派の『明治維新観』形成と『自由党史』西郷

隆盛・江藤新平像の形成過程を中心に」（『明治維新史研究』六号、二〇〇九年）。

(37) 板垣退助「西郷南洲と予との関係」（前掲『日本及日本人』臨時増刊南洲号）。

(38) 板垣退助「征韓論の真相」（『日本及日本人』五四四号、「南洲祭紀念講演集」、明治四三年一〇月一五日）。

(39) 前掲『自由党史』上巻七四―七五頁。

（付記）本稿作成につき、岡山県立記録資料館、宮内庁書陵部図書課宮内公文書館、国立国会図書館、東京都公文書館、東京都立中央図書館特別文庫室、立命館大学図書館修学館リサーチライブラリーの関係各位より御高配を賜った。ここに謝意を表したい。

（文学部准教授）